

又各章の要点

〈戀愛の聖化〉

・キリスト教においては性的感情そのものが原罪

理想においては神のごとく愛しあはねばならぬ

現實においては自己の衝動を原罪と自覺せねばならぬ

キリスト教の極端かつ激しい理想主義

徹底的な自我主義も完全な自我放棄

主體と客體 個人と社會 肉體と精神

善と惡 憎しみと愛

觀念の対立と格闘

戀愛の此月後にかくのとき、人間精神の普遍的な課題をせねばならぬ

・「源氏物語」においては、男の女の情事は、自我と他我との格闘の場となる

甘美な情事はあったか、正しい愛という意識は存在しない

明治にあって日本人の男女関係は、西洋流の考へ方とはき方に影響され、多大の變化をしたか、我々の血の中には、古い情事の意識が残っている

「ア・ナ・カ・レ・ニ・ナ」と「源氏物語」との差を共に識別しない
（とて、我々の戀愛感情の混亂がある）



この混亂を分析しなければ、いつまでたっても我々には不當な悩み、不當な傷つかねばならぬであろう。

へ美的戀愛へ

クリスト教の愛の観念

我々はなんびとも愛しえぬ。しかも、そのことを自覚しつつ
ては、愛すねばならぬ」といふ教へ

クリスト教社會においては

戀愛は、個人的恣意として社會に反逆するもの
相手を獨占しようとするエゴイスティックな
神への愛を忘却し放棄する。原罪

←

これを救ひ、全體の最高の表現である神の愛を
通じる。手だてとして

結婚・一夫一婦制が編み出された

日本においては、男や女間の情事は、最初から大手をふって
文學的主題の王座に登壇した

源氏物語の完璧な美的生活

・暗黒の世界にとり建てられた情念は完全に無視

江戸時代になり、文化と生活様式は階層的なつちがりと
統一が下り、暗黒世界は消滅

・美的戀愛が庶民化し一般化した

・家庭と廊の二つの世界の並存について
倫理的な疑いも苦しみもない

＜戀愛への逃避＞

・過去の日本において 戀愛は 倫理的義務や日常生活の事務からの逃避の場となることにより、はじめにその快樂の保證をえた。

・過去の日本人は 美意識を倫理的に陶冶することを知らず、むしろ 倫理感からの解放に美意識の洗練を期待した。

・西洋流のものを考へる。

すべての人間関係を統一的 連続的に見ると 倫理感の裏づけがある。

彼らの美意識は 恋愛の試煉と云えねばならぬ。倫理的陶冶を経ねばならぬ。

明治になり 日本人は はじめて、さういふ、まじしい、まじりの直面し、混乱が生じた。この混乱の原因を 明治人は ついに自覺しなかつた。今日といへども 十分とは言へない。

・西洋流の戀愛を 輸入するにあたり、現實にぶつかって 戀愛を 聖化しようと格闘する作用を身につけるよりむしろ、 聖化された戀愛という結果だけをひき入れ、安易によりかかってしまった。

情事の美化 (情欲の醜惡面を看過する)

← ←

戀愛の聖化 (プラトニック・ラブの看板をかかげ、ますます情欲の醜惡面を看過する)

明治の戀愛至上主義者の錯覺

戀愛は自由への道か、むしろはさくたかい、ひきあける 避難所となつたのではないか。

←

戀愛は近代日本文學の主題として ついに完成しなかつた。

戀心・感情の混乱

・明治の青年男子

西洋流の精神的戀愛を觀念的に理解したとしても日本人の風俗と肉體とのそれに反抗する。

肉體的戀愛といふ溫暖な風土に

精神的戀愛といふ冷氣が吹き込み

大氣は濁り、じめつき、霧が生じて不透明となる。



今日もまたこの混沌から脱却できぬ。

我々は西洋流の戀愛・文學を擧げ得なかつた。

戀心の意味づけ

・戀愛を意味つけたものはキリスト教である。

・嚴密に言へば、キリスト教的戀愛論以外に戀愛論は成立しない。

かつては戀愛のうちにすべてがあった。

・近代の實證主義精神による分析

近代は一般的に美徳の後楠として個性とありのままに背を返す。

個性を究極にまで追ひつめると

最後に残るのは肉體のみ



純粹な戀愛とは性欲だ。

・しかし性欲に快樂が伴ふことから、性欲を生理學的なものとみ、見ることはまちがひである。

〈性の科学〉

・ 科学は性の機能の説明にとらまるべき
性の意義について説教すべきでない

・ 性教育の普及は我々と性の過ちから救ふ
幸福なる男の女関係の確立に役であつたか

・ ロレンスは性の秘密主義は攻撃したか
性の神秘については敬虔な態度を保持してゐる

・ 性は「生命のエネルギーの源泉」

性の機能の科学的説明を「生命のエネルギーとしての

性の本質」の究明と勘ちかひしたところ

現代の「ホムニアシタス」の不幸がある

〈性の露出化〉

・ かつては性は目的や手段とかはりなく生命の自然感覚と
感得する場であつた

・ この全身的な快楽はいつのまにか視覚的という言葉に
あるいは局部的・末梢的な感覚の満足に席を
ゆづつてしまつた

・ 眼に見える性、これ以上かして露出された性、そんなものは
むしろ実體の亡失したと隠蔽するための仰々しい
祝儀袋にすぎぬ

・ 集中的・根源的な性の快楽はほとんど得られぬ
それゆゑ、この男性において、彼らは性の露出化を
歓迎しなかつた無意識的に、それゆゑ憎悪と軽蔑と
不信をいいてゐる

〈結論〉

極端な精神主義

極端な現實主義

(肉體主義)

✓ 其の觀念的

肉體を蔑視してはゐるが

精神に期待しすぎてはいける

一夫一婦制について

精神の属性であるべき、永遠の觀念をも

肉體にも強いることによつて確立されたもの

肉體と精神的誓約の場とした

理想といふもの

理想とは、我々の内部から生まれた慾望のひとつ

我々の體には人類には命力がある限り、つねに

とんでまわつてゐる。理想とは生命力のこと。

結婚といふもの

人生を統一する場

倫理の最小単位であると同時に

最高の単位でもある。

結婚をりっぱな位置づけられる社会をも
思想もためだ。